

浪花の十二月

「大阪くらしの今昔館」が所蔵する、大坂生まれの浮世絵師・二代長谷川貞信 (1848~1940) が描いた月ごとの大坂の行事と風景の画帖から、とくに見ごたえのある場面を紹介します。

(二代長谷川貞信「浪花行事十二月」「浪花風景十二月」より)



1月 睦月 むつき

今宮十日恵比寿

「いまみやとおかえびす」

毎年正月10日、今宮社は福を祈って詣でる人々にぎわった。境内では米俵や白銀包などの縁起物が売られ、参詣客はそれを買って笹の枝に結びつけ持ち帰るのが習わしであった。芸者を乗せて繰り出すパレード「宝恵駕籠」も祭礼を華やかに彩った。



11月 霜月 しもつき

番船

「ばんせん」

新綿や新酒を積んだ番船は、大坂から江戸へ到着する早さを競った船のレースであり、その年の相場にも関わるため重視された。本図では安治川岸の切手場に切手(参加証)を受取りに来た船頭の乗る上荷船と、それを見物する多数の屋形船や住吉講など群衆の祭騒ぎの様子を描いた。



2月 如月 きさらぎ

早春の梅屋敷

「そうしゅんのうめやしき」

文化初年のころ、高津神社の東側、今の城南寺町のあたりに江戸の亀戸梅屋敷を模して梅林を植え、梅屋敷が開かれた。如月の梅の盛りの頃は多くの人たちが繰り出し、連歌・俳諧・狂歌、演奏や踊りも楽しんだという。のちに、菊の頃にも花壇を設けて春秋ともに賑わった。



12月 春待月 はるまちづき

顔見世芝居

「かおみせしばい」

歌舞伎の年中行事。年一度の役者の交代のあと、新規の顔ぶれで行う最初の興行のこと。大坂では12月に行われた。手打連中という、今という役者のファンクラブがあり、進物を送り、揃いの頭巾をかぶって手を打って祝った。連中は資産家の粹人たちで、町人が芝居文化を支えていた。